

自由南アフリカの声

Voice of Free South Africa

2015年2月

No. 65



～1冊の本が人生を変える～

発行 / アジア・アフリカと共に歩む会

Together with Africa and Asia Association (TAAA)

2015年2月の報告

- 2014年8月～2月 南アにて図書・学校菜園・サッカー支援活動など。
各地で図書研修会、移動図書館巡回、有機農業研修会実施
国内にて、英語の本などを収集、分類・再梱包作業
- 8月 TAAA が外務大臣賞を受賞
- 8月 401箱（英語の本12118冊、算数セット153個、サッカーボール434個）を南アに発送
- 2015年1月 さいたま市にて TAAA 活動報告会・講演会実施

目次

- ・“自立への選択肢”を広げていく三つのプロジェクト（平林薫） 2
- ・TAAA 学校菜園活動にみる農業の教育効果（稲泉博己） 6
- ・南アフリカ民主化20年を迎えた子どもたちの今（サンディーレ・ムカディ） 8
- ・主な活動 10
- ・寄付を下された方々 11
- ・活動の写真集 12



シノクボンガ中学校。TAAA のサポートで設置された図書室でスプリングコンテストが開催された。

中央右：平林南ア事務所代表

“自立への選択肢”を広げていく三つのプロジェクト 図書・菜園・サッカー

TAAA 南ア事務所代表

平林 薫

自分たちの力で何かを始めたい

南アフリカは昨年民主化 20 年を迎えた。今学校に通っている生徒たちは、生まれた時にはすでにアパルトヘイトが終了して自由な社会の中で育ってきたことになる。しかし現在、南ア社会では格差がますます広がり、“経済的なアパルトヘイト”とも言える状況の中で、多くの若者は夢や目標を持たずにいる。自分たちの生活環境がよくなるだろうと期待していた大多数の人たちは、20 年待ちくたびれてしまっているかのようだ。

生まれたばかりの子供が二十歳になると考えると 20 年は長い。ただ、社会を大きく変えるには短いかもしれない。南アは国際社会の一員としての存在の確立と、民主的な国作りという大きな課題を同時にこなさなければならなかった。この 20 年を振り返ると南アは確実に変わり、アフリカ大陸のリーダー的存在となった。そして一握りのアフリカ人たちの生活も大きく変わった。しかし、大多数の人々の生活はほとんど変わらず、社会には不公平感が漂っている。あらゆるレベルにおけるリーダーと呼ばれる人たちが私腹を肥やす姿を目にすることは辛く、信頼感の喪失につながっている。

“結局、政府に頼っても何にも変わらない” そう感じても自分たちの力で一歩が踏み出せない。アパルトヘイトはアフリカ人の自信や自尊心を徹底的に失わせた。自分たちは労働力として使われる存在、いまだにそう決めつけてしまっているかのようだ。遠隔地のコミュニティーには選択肢がないばかりか、ロールモデルもないため、人々は“自分はこれがやりたい”という認識が持てず、何をどのように始めたらいいのかわからないでいる。そしてたとえ素晴らしいアイデアがあったとしても、資本を持たない彼らが経済活動に参加することは極めて難しい。

プロジェクト対象地域は農業に適した土地、気候でありながら、小規模農家がない。アパルトヘイト制度の下では農業は大農場が大企業のものであったため、地域の人たちにとって自営で農業を行うことなどとも考えられない。彼らが最も必要としているのは、自分たちの力で何かを始めるための技術習得や体験の機会、そして資金調達であるが、政府がそのようなサポートを十分に行っているとは言えない。

南アにはしっかりとした社会保障システムがある。女性 60 歳、男性 65 歳以上に自動的に支給される老齢年金は、地域の極めて多くの家庭を支えている。しかし、人々の依存を産み出していることも否めない。若い女性は子供を年金で暮らす母親や祖母に預け、町に出たきり帰って来ない。中にはやはり社会保障システムの一つである子供の養育支援金を町で自分が受取って使ってしまうケースもある。

年金受給年齢に満たない住民には自治体が管理・運営する CWP(コミュニティーワークプログラム)がある。地域ごとにグループを作り、メンバーは学校の清掃や畑作りなど、地域が必要としている活動を行う。少額でも労働して収入を得るとするのは前向きである。圧倒的に女性の参加者が多いが、少しずつ男性、特に若者の姿も見られるようになってきた。ただ、単純作業・労働が多く、その先のステップとしての小規模ビジネスにはなかなかつながらない。



ヘイグ氏のエナレニ農場で研修を受ける教師と生徒たち

学校教育を通して自立への選択肢を広げる

このような環境の中、私たちの活動が目指しているのは、学校での教育を通して生徒や地域住民の“自立への選択肢”を広げていくことだと考えている。図書・菜園・サッカーの 3 つのプロジェクトを行うことで、様々な活動に関わる機会を

増やし、自分の興味や得意とすることを認識して欲しいと願っている。

最近よく“パッション(情熱)”の話で盛り上がっている。“好きこそもの上手なれ”という通り、好きなことに対しては情熱を持って取り組むことができ、継続して行いうち、結果として達成できる可能性が高い。“趣味と仕事は別”という意見もあると思うが、好きなことを仕事にできれば、これ以上幸せなことはないだろう。もちろん、パッションを仕事にするためには、並はずれた才能と忍耐力が必要ではあるが。

ヘイグ氏の農場から学ぶ

私たちの“パッション”代表者は、菜園活動の指導者リチャード・ヘイグ氏だ。彼の経営する ENALENI (エナレニ) 農場では、小規模ながら牧畜、養鶏、菜園、花の栽培、乳製品や保存食品作りとあらゆる農業が営まれている。しかも農場内の設備はほとんどが手作りで、物資も何一つ無駄にせずリサイクルして利用する“自然農業”であり、飼育している家畜は地域伝統種なのである。対象校の校長も、教師も、そして生徒も、農場研修では見るもの、触れるものすべてが貴重な経験である。



自家製のマヨネーズの作り方を学ぶ生徒

研修会の講師が“農場経営の白人男性”と聞くと、まず南アの典型的なファーマーのイメージを思い浮かべることだろう。しかし研修を受けてその正反対であることに参加者は驚き、最後には“自分もやってみたい”という気持ちにさせられる。自分の情熱を誰かにうつすことができる人がやはり本物のパッション人といえるだろう。以前、リチャードのお父さんに会う機会があり、“リチャードが活動に参加してくれて本当によかった”と伝えたところ、“あいつは自分のやっていることを信じているからね”と言っていた。パッションを持った人自身の努力はもちろん、周りの人たちがそれを認識し、様々な形で応援することによって才能が開花するのだ、と感じた。

図書室設置と学校の格差

私自身はどちらかというともあれこれもと欲張ってしまい、長続きしないタイプ。結局は“これだ”という才能がない。そんな私が今一番凝っているのは“本の仕分け”である。“あの学校には理数系の本が足りないな”“あの学校からはやさしいリーダーのリクエストがあったな”などと考えながら寄贈用の箱を作っていくのがとても楽しく、時折面白い本を読み始めたりして一日中続けてしまうこともある。とにかく本に囲まれていると幸せなのだ。学校にも“3度のご飯より本が好き”という司書教師がいて、そのような学校は当然図書活動が活発で、生徒たちにもいい影響を与えている。

学校の状況はと言えば、多くの学校の設備はますます古くなるばかりで、とりあえず教科書は確実に届いているものの、その他の本や教材は不十分な状態が続いている。生徒が学校で授業以外に何か経験、体験をする機会はほとんどない。地域の学校はほとんどが“No Fee School (学費を払わなくてよい学校)”なので、学校の運営も大変である。地域の家庭の状況が厳しいため、教師は教鞭を取るだけでなく、時に保護者やソーシャルワーカー的役割も果たしている。もちろん、中にはビジネスライクな教師や、労働組合や政党間の争いなど政治を学校に持ち込む教師もいるが、当然教育に情熱を傾ける教師が圧倒的だ。プロジェクトが微力でもそのような教師たちの力になればうれしい。

対象校のベキジズウェ小では、在南ア日本大使館の草の根無償協カプログラムの支援により、校舎の増設が開始された。同小は昨年、グレードRの教室の屋根が突風で吹き飛び、木造の教室も崩れそうになっていた。また、2年生と3年生が1教室で学んでいたことから、2教室と図書室の建設となった。スペースがなかったため教室内にコーナー・ライブラリーを設け、また移動図書館車の本も利用して、生徒はとともよく本を読んでいる。ンマンボ校長は、“ベキジズウェの卒業生は本がよく読める、と中学の先生から褒められたのよ”とうれしそうに話していた。2月中旬時点で基礎部分が出来上がっており、あとは屋根と窓枠など、材料が揃い次第取り掛かるとのことで、4月の第2学期からは新しい教室と図書室が利用できるだろうと期待している。

ところで、日常生活の中でスイッチを入れれば電気がつき、栓をひねれば水が出ることは、今私が住んでいる住宅地でも普通のことである。また、買い物に行きたければ自家用車ですいすいと。ところが、それほど離れていない活動地域の人たちの多くはそのうちの少なくとも一つ、もしくは二つを持たず、山間部に行くと“すべてなし”という住民が多くなる。計画停電で一日2時間程度電気が来ないことに文句など言っていない。もちろん、誰もが少しでも便利な生活がした

いと考えるのは当然のことだ。山間部の住民の間では、親戚や友人を頼るなどして沿岸部に移住するケースが年々増えている。家族全員で移住となると子供は転校せざるを得ない。そのため、沿岸部の学校の生徒数が急激に増加し、山間部の学校の生徒数が激減している。これは双方の学校にとって大きな問題をもたらしている。

ただでさえ設備が不十分で老朽化も激しく、教材も足りないという状況の学校にどんどん生徒が押し寄せ、沿岸部では生徒数1200-1300名の学校も出てきている。教室の増築が間に合わない場合は、結果として一教室に50-60名の生徒を詰め込まなければならない。反対にどんどん過疎化する山間部の学校では、生徒数に合わせて教師が配置されることから、7-12年生が通う高校に教師が3名という学校もある。どちらの場合も、校長や教師は大変苦心している。

そのような状況の学校での教育の少しでも支援になればと図書室の設置や本や教材の寄贈を行っているが、地域の根深い問題に巻き込まれることもある。対象校クワバヴ高のある地域にはいまだに電気も水道も通っていない。どれだけ自治体にかけてあってもかなわず、もうこれ以上待てない地域住民は電源のある学校に侵入して携帯の充電や、サッカーの試合がある時はポータブルテレビを持ち込んで観戦する。ついでに何か持って行かれるものがあればと荒さがしをして、例えばタンクから水を持ち出したりする。

“キング牧師の本が読みたい” リクエスト

せっかく設置した図書室も鍵を壊されて中を荒らされてしまった。幸い本棚は壊されておらず、本も箱に戻して保管してあるため、学校側の準備が整ったら再開予定。その行為自体は許し難いことだが、地域住民のいらだちも理解できる。同校では地域の影響をもろに受け、多くの生徒が反抗的・無気力に見える。しかし、図書委員会の生徒からは“キング牧師の本が読みたい”などリクエストがあり、持って行ったこともあった。真剣に勉強したい生徒や、まじめに活動に取り組みたい生徒がいる。だから、私たちはあきらめずに学校訪問を継続し、生徒たちに読書の機会を与えたいと考えている。



南アフリカの学校は1月開始で12月終了であることから、現在各校では教師も生徒もやっと新学年に慣れ、落ち着いてきたところだ。前述の人口移動に伴って生徒数の増減があり、今年はかなり教師の異動や校長の退職が見られる。ただ、活動に関しては、委員会システムが定着しており、各校ではまず担当教師の配置(異動があった場合や変更が必要な場合)とメンバー生徒の選考を行った。図書活動では、他高校で図書室を立ち上げてしっかりと活動を行っていた司書教師が、これまで活動が進んでいなかった高校に配属となり早速活動を開始したという嬉しい例も見られる(もちろん、彼女を失った学校には申し訳ないが)。長年菜園活動を共に行い、様々な情報や意見交換をしていたインプメレロ小のムソミ先生が遠くの学校に転任となって

しまったのは残念である。同小では引き継いだ担当教師の下、今後も活発に菜園活動を続けて行って欲しいと願っている。

広がる家庭菜園と卒業生グループの菜園活動

昨年度後半からは、学校菜園活動に参加している生徒たちに種や苗を持たせて家庭菜園を推進している。小学生のほとんどはお母さんやおばあちゃんと一緒に畑作りをしているが、中高校生は“自分の区画”を持って畑作りをし、すでに収穫を得ている生徒もいる。また、小学生の時にプロジェクトで畑作りを学び、高校生になって家庭菜園を行っている生徒がいるのを見ると、活動を継続することの大切さを感じる。

対象校のプロジェクト担当教師が活動に興味を持ち、熱心に取り組んでくれている場合には、もちろん活動が順調に進んでいく。校長から任命されたので仕方なく、といった教師が担当になった場合はお互いに大変である。特に菜園活動の場合、“畑仕事は疲れるし、手や服が汚れるから・・・”というような教師では無理だし、やっているように見せかけることも不可能である。教師には申し訳ないが、校長に依頼して担当者を変えてもらった学校もある。

4つの対象校をベースとした卒業生グループの菜園活動も、それぞれのペースで活動が行われている。グループごとに環境が異なり、卒業生とは言っても年配者も入っていたりするが、現時点で圧倒的にリードしているのが男性メンバー2名

を中心に活動が行われているムタルメグループだ。シーズン毎に旬の野菜を収穫、販売している。当初、販売先を探すのに苦心したが、学校のフェンスに段ボールの広告を掲げたところコンスタントにお客さんが来るようになった。また、近くのクリニックに訪問販売したり、年金支給日にお店を出したりして少しずつ知名度を上げている。リーダーのンギディ氏（[前頁の写真参照](#)）はやはり“畑パッション”の人。“ずっとこれがやりたかった。このような機会を与えてくれて本当に感謝している”との言葉ももらった。昨年は新しい試みとしてケールやカリフラワーなどを栽培したが、地域住民は食に関してかなり保守的で、新しい野菜を好まない傾向があるため、今年はおく一般的な野菜作りを行うことにした。

TAAA の菜園活動が家庭菜園への支援を強化する中、トゥルベケ小のドラドラ校長からは、“今年度沿岸部から数家族が子供たちと共に地域に戻ってきたため生徒数の増加が見られる”という前向きな話があった。ドラドラ校長先生も“畑パッション”の人だ。若い時、教師になるか、農業に携わるかの選択に悩んだそうだ。寡黙な人で、時間があれば畑に出ている。その姿に教師も生徒も刺激され、130名ほどの生徒はほとんどが活動に参加している。州農業省の担当官が地域菜園コンテストの候補として同校を視察し、“有機でここまでできるとは”と驚いていたという。コンテストには多くの参加があった中で、1位はクリニック、2位は教会、そしてトゥルベケ小は3位に入賞した。



ところで、地域の小・中学校では圧倒的に女子生徒の方が活発で優秀だ。昨年末に何校かの卒業式に招待されたが、成績優秀で表彰される生徒はほとんどが女子だった。男子生徒はシャイな子が多く、本当は力を持っているのに発揮できていないように見える。一生懸命やるのはかっこ悪いとか、ピアプレッシャー（友達の影響）もあるだろう。また、地域や家庭に男性のロールモデルが少ないことも理由の一つと考えられる。現在、TAAA の活動は若い男性スタッフ3名、シャリ・モコテリ、ボングムーサ・グメデ、カムレラ・グメデ（[上の写真参照](#)）が行なっている。内2名は地元出身で、彼らが卒業した学校を訪問しているため教師の中に顔見知りがあり、様々な情報が入手できる。男子生徒のロールモデルともなるし、話しやすいので生徒が違和感なく活動に参加できる。スタッフの潜在能力に驚かされることも多い。

最近では学校訪問時に委員会メンバーの生徒とコミュニケーションを取ることが増え、時折、生徒に将来の夢や何になりたいかを尋ねている。以前は警察官、教師、看護師やソーシャルワーカーなど、周りに見たことがある職業しか返って来なかった。しかし、シノクボンガ中の男子生徒は“ファッション・デザイナーになりたい”と答えた。ビーズ細工や手芸が大好きなのだという。夢や目標をはっきりと言える生徒は自分の好きなことや才能を認識しているのだ。ロゼッテンヴィル小7年生のザマさん（現在はシボンギムフンド高8年生）は、“将来は環境と伝統を守りながら有機農業をビジネスとして行いたい”と話していた。彼女はほとんどの課目で80~100%の成績を上げている才媛なので、“医師”などの答えが返ってくると思っていたが、うれしい驚きだった。同校は継続してJICA 菜園事業に参加しており、2年前にエナレニ農場で研修を受けた経験が彼女に大きなモチベーションを与えたのだった。

地域の若者たちはあらゆる可能性を秘めている。彼らにはそれを認識し、発揮する機会が必要である。彼らの“夢”を応援すること、それが私のパッションと言えるかもしれない。

育苗所の中で作業するザマさん



自分の力で野菜作りをするトゥルベケ小の生徒



南アフリカ共和国における TAAA 学校菜園活動にみる農業の教育効果

稲泉博己 (東京農業大学教授)

1. 調査の概要

昨夏 2014 年 8 月 26 日から 9 月 3 日にかけて、(特活) アジア・アフリカと共に歩む会 (TAAA) の皆さんに無理をお願いし、学校菜園プロジェクト対象校、小中高校合わせて 17 校を訪ねた。出張者の大きな目的は、南アフリカ共和国における学校菜園活動の実態から、農業の教育力、その効果について考えることにあった。

2. 調査結果と考察

(ア) 学年・年齢と取り組みの特徴

学校菜園活動を行っているのは、準備学年 (Grade R : Reception、6 歳) ~ 第 12 学年 (18 歳、なお義務教育は第 10 学年まで) の小・中・高校段階の児童・生徒たちである。このうち第 4 学年から第 7 学年まで、日本では言えば小学校高学年から中学の初めころまでの子どもたちが、好奇心も旺盛に発達し、また体力も十分に備わっているため、菜園活動に最も熱心に取り組むという。

(イ) 運営方式

学校によって菜園活動の運営方法も様々であり、小規模校などでは全校参加という場合もあるが、有志の菜園クラブ形式が主流と見られる。

(ウ) 菜園生産物の利用

栄養不良の子どもたちが多い貧しい地域の学校では、学校給食での活用がメインになる。一方、生産物を教員あるいは地域の人たちに販売して、売り上げを次作のタネ等資材購入に充てているところもあった。

(エ) 授業科目との連動

菜園活動と並行して、小中学校では理科、高校では農業基礎など授業科目と連動させることで、相乗効果が見られるという。

(オ) 菜園活動の実態

ある高校 (全校生徒 542 名) では、2013 年 8 月に 18 人の有志で菜園活動が始められた。現在ではその数が 30 人に増えている。またある小学校 (全校児童 498 名) では、第 4~7 学年の児童約 30 名が参加しているが、やはり当初の 10 名程度から増えているという。

(カ) 食育活動の取り組み

菜園と同時に TAAA の指導によって 'House of Nutrition' (栄養指導) も実施。学校菜園で採れた野菜を並べた、まさに我が国で言う「食事バランスガイド」のようなディスプレイが教室に設置されていた。これをもとに、食事における栄養バランスについて指導している。

(キ) 参加生徒の印象

菜園作業の印象についてある中等学校の生徒たちは、最も楽しい作業は収穫であり、逆に嫌な作業は乾季の水遣りと答えた。収穫の喜びはいつでも同じであるが、つらい作業の筆頭「乾季」の水遣りは、雨季と乾季の差が



南アフリカにて筆者(左)



はっきりしていて、乾季の降雨が期待できない当地ならではのものと言える。また野菜の中で最も好きなものは、ニンジンやホウレンソウ、逆に嫌いな野菜はキャベツであった。この理由は、日本の子どもたちのように苦いとか酸っぱいとか食べる印象ではなく、育てやすさ、例えばキャベツは病虫害にあいやすく管理が大変なので「嫌い」とのことであった。

一方菜園活動を指導している現地 NGO 農場視察研修の印象として、環境のことを考えて行動していること、例えば糞尿を使った堆肥作りに感銘を受けたり、多様な動物を抱えている

ことと、その利用法の多様さに驚いたりしていた。また農場主について、農業に情熱を持って、人生を楽しんでいると感じたので、将来農業をやってみたいという声もあがっていた。

3. 小括

1998年に農山漁村文化協会は、「いま日本の教育は『生きる力を育む教育』などをキーワードに、明治の学制発布、戦後の新教育と並ぶほどの大きな改革がすすめられている」と指摘した。これは2002年学習指導要領に示された「新しい学力観」や「ゆとり教育」が、明治以降の日本の教育における第三の画期であるという認識であり、こうした中で出されたのが食育基本法であり、食育、食農教育等の取組であった。

今回訪ねた南アフリカ共和国の学校菜園の実態—特に小学校高学年生の熱心な取り組みや学校毎の扱いの差異等—から見ると、今や日本では風前のともし火感の強い上記の「生きる力」や「ゆとり教育」が、強く求められていることを感じる。したがって今後、我々の食育、食農教育、およそ10年の総括を速やかに行いつつ、将来を見据えて彼我の経験の交流やアイディアの交換を積極的に行っていく必要がある。

本稿は、第14回アフリカ教育フォーラム（2014年10月24-25日、京都・地球研で開催）に於ける口頭発表要旨をもとに、再構成したものである。

本調査に際しては、特定非営利活動法人アジア・アフリカと共に歩む会、久我祐子代表、野田千香子事務局長、平林薫南アフリカ事務所代表はじめ、多くの関係者にお世話になった。ここにあらためて謝意を表したい。

なお本研究は科学研究費助成事業基盤研究（A）課題番号：25252041「人・地域づくりに貢献する主体形成・価値創造型の農業・農村支援モデル」（研究代表者・稲泉博己）による研究成果の一部である。

<TAAA 南アフリカ事務所代表 平林薫より>

昨年8月末から9月初めにかけて稲泉先生が視察訪問して下さった学校では、いただいたアドバイスや励ましの言葉がモチベーションとなり、現在も着実に活動が行われています。その後、教師研修会の際に担当教師が少し自慢げにご訪問の報告をしたところ、他校の教師から“次回は絶対うちの学校にも来てくれるようお願いして”と言われてしまいました。専門家のリチャード・ヘイグも先生とお話しできたことを大変喜んでいました。今後も引き続き、現地の視察ご訪問とアドバイスをいただければ幸いです。よろしくお願いたします。

2015年1月12日(月・祝) TAAA 講演会

南アフリカ民主化20年を迎えた子どもたちの今 ～なぜ生きづらいのか・どこへ向かっているのか～

浦和のコミュニティー・センターで行われた今年の報告会は、2014年南ア・スポーツ賞ボランティア部門で金賞を受賞したサンディーレ・ムカディさんと、TAAA南ア事務所代表平林薫の二人を講師として行われました。

ムカディさんからは、ストリート・チルドレンの実態やその支援活動についてご報告をいただきましたが、報告半ば、来場者全員にバナナを配り、皆で「バナナの歌」(?)を歌いながら食べていくというアイスブレイクを入れるなど、終始非常に和やかな雰囲気で行われました。

平林さんは、南アの現在の状況、TAAAの菜園・図書・サッカー支援等の活動を、子ども達や学校の写真スライドを使いながら紹介しました。

参加者から多くの質問や意見も出て、あっという間の大変有意義な3時間となりました。ご講演の内容につきまして、次の通りご報告させていただきます。ここでは1部について報告をいたします。(記録:米山周作)

1部 講演 サンディーレ・ムカディ

南アのダーバンを拠点としたNGO「ウムトンボ」スタッフ

2014年南ア・スポーツ賞ボランティア部門金賞受賞 (写真:平林薫と)

私は、ストリートチルドレンを保護し矯正させる「ウムトンボ」というダーバン在住のNGOで働いています。当初はサーフィンのコーチとして入りサーフィンを教えていましたが、今はソーシャルワーカーとして子ども達のケアを中心に行っています。

保護の対象はおもに14歳から20歳までの若者で、彼らは一人一人異なる理由でストリートに出てきます。路上生活が長いと家庭生活ができなくなってしまい、なかなか家庭に戻れなかったり、一旦戻っても、結局路上に戻って来ってしまう子どもが多いのですが、11歳から路上生活を続け18歳で家に戻った例や、ストリート・チルドレンのためのワールドカップ大会に出場して自信をつけて家に戻り現在も頑張っている青年もいます。これまでおよそ100人の子ども達のケアを行い、60人を家庭に戻すことができました。ドラッグに関わる子どもが多いので、朝に散歩をしたり、体操をしたり、スポーツやレクリエーションなど何かに関わらせて、健全なライフスタイルを確立させることがとても大切です。ストリートで生活習慣が乱れた子供たちに、体操、サーフィン、ウォーキング等を通して生活のリズムを整えることに重点をおいたこと、そして、家庭訪問やペアレントミーティングなどを行い、彼らの保護者にも働きかけていったことが、多くの子どもたちを立ち直らせた成功の要因だと思っています。接し方に関しては、子ども達を十把一絡げに扱うのではなく、一人一人の性格や行動について理解してあげることが大切です。現在は、心理学の手法を使い、子ども達を次の6つの性格に分類し、どのカテゴリーに属するのかを把握してから、個々の子どもにアプローチしています。



朝に散歩をしたり、体操をしたり、スポーツやレクリエーションなど何かに関わらせて、健全なライフスタイルを確立させることがとても大切です。ストリートで生活習慣が乱れた子供たちに、体操、サーフィン、ウォーキング等を通して生活のリズムを整えることに重点をおいたこと、そして、家庭訪問やペアレントミーティングなどを行い、彼らの保護者にも働きかけていったことが、多くの子どもたちを立ち直らせた成功の要因だと思っています。接し方に関しては、子ども達を十把一絡げに扱うのではなく、一人一人の性格や行動について理解してあげることが大切です。現在は、心理学の手法を使い、子ども達を次の6つの性格に分類し、どのカテゴリーに属するのかを把握してから、個々の子どもにアプローチしています。

- ① ハーモナイザー (Harmonizer) : 常に相手に対してのリスペクトを持ち、平和を貴ぶ。
- ② パシスター (Persister) : 自分の信念に固執し、とにかくそれを主張する。
- ③ シンカー (Thinker) : 全てを時間通りに、考えながらしっかりと行う。
- ④ イマジナー (Imaginer) : あらゆる想像を巡らせながら、ゆっくりと事を進める。
- ⑤ レベル (Rebel) : 常に強気で反抗的。
- ⑥ プロモーター (Promoter) : 自分に自信があり、自分を見てほしいとする自己顕示欲が強い。

また、「ポスト 16 (Post 16)」という 16 歳以上にライフスキルを教える技術習得プログラムを用意したり、子どもたちが問題行動を起こしやすい長期休暇中には、様々なイベントを開催したりして、できる限り彼らを健全なアクティビティに専念させるように努力しています。

私は昨年末に、2014 年南ア・スポーツ賞ボランティア部門で金賞を受賞しましたが、ノミネートの段階でも全く予告がなく、突然知らされたので驚きました。審査員はこっそり私の活動を視察しにウムトンボに来ていたようです。(平林 薫 TAAA 南ア事務所代表) 2014 年南ア・スポーツ賞の表彰式がセントンのコンベンション・センターで行われました。表彰では 30 秒のスピーチがあり、他の受賞者が家族や知人に感謝の意を伝える中、サンディーレは「隣の人に『愛している』と言って下さい (Say I love you to people next to you)」と語ったので、開場から大きな拍手がおこりました。



〈参加者からの質問〉

Q1) 6 つの性格分析について、もう少し聞きたい。

1 つの分析方法ではあるが、路上で見せる顔と、家で見せる顔とは違う子どもも多い。子どもの性格を単純に 6 つに分類して、「この子どもはこのカテゴリー」と 1 つにくることはできない。その子どもがどういう子どもなのかを理解するのは本当に難しい。

ダーバンコミュニティサーフィンチーム

Q2) どのような職業訓練があり、それを受けるための条件とは何か？

家に戻った子ども達が対象。月曜日から金曜日までで、休日は必ず家に帰る。保護者にも分かってもらうことが大切。内容には識字教育、溶接、音楽等がある。

Q3) この活動を始めるきっかけは？

オーストラリアの取り組みを知り、大きな影響を受けた。自分はサーファーでジャッジでもあったので、路上でただぶらぶらしている子ども達にサーフィンを教えられと思った。何かで忙しくさせておけば、悪さをする時間もない。

Q4) 活動資金はどうしているのか？

どの団体も活動資金の確保は大きな課題だろう。プログラムごとに予算がつくのだが、今はオランダからの支援があるだけ。資金確保にはいつも悩まされる。

Q5) ストリート・チルドレンはなぜ発生するのか？

まず親に職がないことが多く、家に食べ物がないことに子ども達が耐えられない。子ども達も家庭の状況が厳しいことは分かっているので、親に食べ物を求めることができない。他にも親が事故に遭ったり、HIV で亡くなったりして孤児になることもあるが、近隣や親戚の人々の世話にはなりたがらない。年金や社会保障を受けている家の子どものもいるが、結局路上に出た方が、何にも縛られずに自由を感じる子どもも多い。路上で物乞いをして、親がそれに支えられているケースもある。女の子は売春も多い。数年路上生活が続くと、なかなか普通の生活に戻れなくなってしまう現実もある。

Q6) ウムトンボから学校に戻らせることはできないのか？

学校訪問は行う。一旦子どもが家に戻ったら、私達は校長先生と話して、翌年度から学校に受け入れてもらえるよう働きかける。年度途中で入ることは難しいので。しかし、制服がないので学校に通えないということもある。



ピースボートがダーバンに寄港→

◆ 主な活動 (2014年7月16日～2015年1月15日)

下線は南アにおける活動

〈日本国内〉

7/20 梱包作業と会議 平林薫 大友深雪
森直之 北爪健一 野田千香子 高野千恵美
久我祐子 国兼尚史
浦和学院より 佐々木未悠 小林美穂
7/23 清泉インターナショナルスクールより本引き取り
浅見克則
8/2～8/20 会報64号編集 野田
8/4～8/10 校正 発注 西村裕子 野田
8/4～8/15 会報発送封筒準備など 高野
8/4 外務大臣賞表彰式参加 TAAA 受賞 久我 野田
8/6 サッカーポスター作製 森
8/17 梱包作業と会議 浅見克則 野田 大友
西村 高野 浦和学院高校より 真中彩
松下亜希 本間真由 竹下恵莉華
8/25 南アへ本・算数セット・サッカーボール出荷
9/10 アメリカンスクールインジャパンより本引取り
浅見
9/21 作業、ファンレイジングの会議 久我
鯨井幸一 丸岡晶 大友深雪 西村 高野
野田 丸山綾子(商船三井より)
9/26 国際ボランティア貯金助成事業寄附金の
申請書を提出 久我
10/2 東京農大 稲泉教授を訪問 久我
10/5 ポスター発送作業 鯨井
10/7 本のレベル別種分け作業 久我
10/16 JICA第2四半期報告提出と会議 久我
10/19 梱包作業と会議 浅見 鯨井 近畿大学 4年
土橋啓泰 明治大学 3年船橋諒平
11～12月 1月報告会の準備 丸岡
11/4 ゆうちょ財団のボランティア貯金助成事業の
申請書を提出 久我
11/15 作業場へ図書等をトラックで搬入 北爪健一
11/16 梱包作業と会議 鯨井 浅見 上林潤子
須田 久我 浅見 鯨井 大友 梶村佐喜江、
11/28 (株)リコー本社 訪問 久我
11/21 ひろしま助成金申請書 提出 久我
12/21 作業&忘年会 久我 野田 鯨井 丸岡
大友 高野 浅見
12/26 平林と会議 久我
1/9 (株)リコー訪問 平林 久我
1/12 TAAA 講演会 講師: 平林薫およびサン
ディーレ・ムカディ 懇親会
1/14 JICA 訪問 第三四半期報告と会議 平林
久我

〈南アフリカ共和国〉

7月24日 一時帰国より南アに戻る 平林
7月28日 スタッフ会議と学校巡回訪問指導 平林
7月29日～8月8日 学校巡回訪問指導 平林・カムレラ・シャリ・ボングムーサ(以下同様)
8月9日 本の仕分けと整理
8月11日～15日 学校及びグループの菜園訪問 菜園スタッフ・平林
8月13日・28日 菜園事業・生徒対象農場訪問研修開催 菜園スタッフ・リチャード
8月19日・21日 菜園事業・校長対象農場訪問研修開催 スタッフ全員・リチャード
8月22日 ドウドウドウ地域カレッジに本の寄贈 カムレラ
8月25～26日 学校巡回訪問指導 平林
8月27日～9月2日 東京農大・稲泉先生と菜園活動を視察訪問 平林
9月3日～9月8日 学校巡回訪問指導 平林
9月9日・10日 菜園事業・教師対象研修会開催 スタッフ全員・リチャード
9月11～26日 学校巡回訪問指導 平林
9月29日～10月2日 学校巡回訪問指導
10月4日 日本から届いた貨物の搬入作業 スタッフ全員・アルバイト3名・KWE松田さん
10月6日～10日 学校休暇中のためスタッフ会議及び次期活動の準備 平林
10月8日 卒業生グループおよびURDOメンバー対象農場訪問研修開催 スタッフ全員・リチャード
10月13～17日 学校巡回訪問指導 平林
10月16日・23日 菜園事業・生徒対象農場訪問研修開催 菜園スタッフ・リチャード
10月20日・24日 Siyaphemba 小の敷地内に育苗所設置 スタッフ全員
10月21日～31日 学校巡回訪問指導 平林
11月3～14日 学校巡回訪問指導・アンケート実施
11月16日・22日 本の仕分けと整理 平林
11月17～28日 学校巡回訪問指導・アンケート実施 平林
12月2～8日 学校巡回訪問指導・卒業式出席 平林
12月9日 州農業省担当者及び地域菜園メンバー対象農場訪問研修会開催 スタッフ全員・リチャード
12月10～19日 卒業生グループ及び生徒の家庭菜園訪問指導 菜園スタッフ 平林
12月18日 州教育省SEM ザミサさんと会議 平林
12月21日 日本に一時帰国 平林

■ 寄付金・会費などを下さった方々

学校法人ラ・サール学園 千綿京子 大久保忠人 平野克己 井関純 竹口美鈴 小松美穂 澤田参子 横山晃祐 嶋田邦子 増山久一郎 楠山道祥 山下久美子 伊藤宏 丸岡晶 北爪健一 津山直子 柳澤悦子 吉田昌夫
ここまでは 2014 年 7 月 15 日までに下さいましたが 64 号に記載してなかったかたです。

以下は 2014 年 7 月 16 日～2015 年 1 月 15 日に下さったかたです。

西島知佐 伊藤宏 久我祐子 辻井健二 五十嵐敦子 安達二郎 上林陽治 田中誠 青山学院高等学部 吉田美智子 辻井剛 平林薫 浅見克則 津山直子 上林潤子 加藤公満子 澤野典子 漆原道子 武藤伸子 浦和学院高校 安部弥生 パブリックリソース財団 見山統規 塩野谷憲史 山下久美子 井関純 高柳俊哉 (株)コンセプト 小宮山明子 中山愛理 富岡世津子 学校法人ラ・サール学園 原若葉 吉次とも 松浦佐和子 梶村佐喜江 飯倉靖子 山本隆英 嶋田邦子 和田香誉 丸岡晶 榎原亜季子

■ 団体からの寄付その他の協力

- ・公文教育研究会
- ・(株)コンセプト
- ・特定非営利活動法人パブリックリソースセンター(Give One)
- ・学校法人ラ・サール学園
- ・浦和学院高等学校
- ・青山学院高等部
- ・ゆうちょ財団

■ 英語の書籍や算数セットやサッカーボールなどの寄付をして下さった方々(2014 年 7 月 16 日～2015 年 1 月 15 日)

町田しおん 大竹 福井美智子 加藤沙織 木田啓介 内海千春 加賀真理子 須藤正也 浦山健 宮坂宏美 桃原章 アメリカンスクールインジャパン 武田美和 宇根洋幸 杉田史子 青山学院高等部図書館 福島美佳 原若葉 清泉インターナショナルスクール 中村淑子 土屋淳子 近藤眞智子 桑田紀子 ミラー裕子 吉次とも 高山真弓 佐野公子 斉藤千夏 三上園子 丹下正 河田広 三浦早苗 山本佳代子 中真里 伊藤 レイクランド大学 和田朱子

■ 本の海上輸送援助 (株)商船三井

■ 助成金 彩の国さいたま国際協力基金 「南アフリカ共和国貧困地域における高校図書室設置支援」(2013 年度) ボランティア貯金寄付金配分金「基礎教育支援のための学校図書室の配備と巡回指導」(2013 年度)

■ 協力事業 独立行政法人国際協力機構(JICA)草の根技術協力パートナー型事業 (2013 年 8 月～2016 年 1 月) 「学校を拠点とした有機農業促進のモデル地域作り [南アフリカ共和国]」

*お名前が入っていない方やお名前が違っているかたがおられましたら、お知らせ下さるよう、お願いいたします。

- ・毎月、第3日曜日に JR 埼京線「南与野」の作業場で本の梱包をします。参加を希望される方はご連絡下さい。梱包作業のほかに、会報の発送作業や事務や PC 作業などの仕事をして下さるボランティアのかたを募集しています。
- ・TAAA のホームページを更新しております。日頃の TAAA の内外における活動や実績をご覧ください。
- ・TAAA では、寄附金やボランティア労働や英語の本の寄贈などにより、長期的に会を支えて下さる方を必要としています。会員を募集しています。長期的に支援して下さるかたは、会員になって下さると有難く、お願い申し上げます。
- ・会員の皆様へお願い 年会費5000円は同封の振込用紙で、早めにご送金くださいますよう、お願いいたします。
寄付金のお振込みもどうか、よろしく願いいたします。

☆ルイボスティのご紹介☆

ルイボスティ茶は南アの西ケープ州だけでとれる健康茶です。1 パックでヤカン1杯、作れます。1 箱 80 パック 2,000 円です。(送料一律 500 円。5 箱以上送料無料) お申込みは、TAAA事務局へ。

☆会報はホームページからもご覧になれます。

◆英語の本や算数セットやサッカーボールや空気入れのご寄贈の際の送付先は以下の宛先になりました。

段ボール10箱というような大量の荷物をお送りくださる場合は、事務局(090-7702-4939)へ事前にお電話いただくか、メールでご連絡下さい。

☆本・サッカーボール・算数セット・空気入れ以外の物品のご寄贈は、お控え下さるよう、お願いいたします。

送り先は

〒360-0847 埼玉県熊谷市籠原南 (かごはらみなみ)1-321 北爪健一 電話:048-532-5236

まつぶし

松伏 町役場を訪ねる 野田千香子 (松伏町役場の前で→)

先日、松伏町の役場の選挙管理委員会を初めて訪ねる機会がありました。松伏町でかつて使われていた移動図書館車が TAAA の南アへ送った移動図書館車の第 1 号でした。18 年前にすでに廃車にされて松伏町から遠く離れた土地に置かれていた「まつの木号」を TAAA が貰い受け、ヨハネスバーグの近郊に送り、今もそのまま使われているのです。初めて訪れた松伏町は南アのように空が大きく広い町でした。選挙管理委員会のかたにマンデラ大統領と移動図書館車の写真をお見せすると、「あ、「まつの木号」、覚えています。小さいとき、知っています」と喜ばれました。持参した TAAA20 周年記念誌は町長室に置かれることになりました。

